



「PIKAPIKA in CHIBA TOCHKA×WICAN×YOU」撮影風景（千葉市美浜文化ホール）

Topics

美術館の休室について

無縁寺心澄の描いた千葉一絵と写真で見る昭和前期の千葉

サトウ画廊コレクション～現代版画の魅力

千葉アートネットワーク・プロジェクト2009

美術館の休室について

現在、千葉市美術館は展示室及び貸出施設を休室しております。空調関係の改修工事のため、来年、2010年の2月までこの状態が続くことになります。ご利用の皆様にはご不便をおかけしますが、明日のより良い美術館のためとご理解下さいますようお願い申し上げます。

美術館が収まる建物は、1995年11月の開館以来すでに10数年が経過し、それ相応に経年劣化が目立ってきましたが、とくに空調関係は来館者の快適な鑑賞環境を整えるためはもちろんのこと、美術作品ないしは文化財の保存のためにも重要な設備であり、この際思い切ってリフレッシュさせていただくこととなりました。全館にわたり、しかも微妙な工事のために、長期間にわたらざるを得ませんが、来年の3月6日(土)から始まる千葉市民美術展覧会に間に合うよう、工事関係者、美術館員の懸命な努力が続いております。新しく装備された美術館で、市民の皆様の力作、傑作が出そう市民美術展を開催できる日が、待ち遠しく思われます。それまでしばしの間、ご迷惑をお許し下さい。

休室中、美術館の所蔵作品を展示する活動としては、1階のさや堂ホールで「現代日本の彫刻」展を2期にわたって開催するほか、近くの千葉市立郷土博物館で地元作家無縁寺心澄の特別展、稲毛区の千葉市民ギャラリー・いなげでの現代や近代の版画展示などを企画いたしました。これまでとは違った環境での千葉市美術館所蔵作品とのご対面も、あるいは新鮮な体験となるかも知れません。お楽しみいただければ幸いです。

休館中の行事の一つとして、11月25日(水)の友の会バス・ツアーがあります。今回は房総の神と仏をテーマに、いくつかのお寺を回

り、お昼には海の幸に恵まれる千葉県ならではの、地魚のご馳走にもあずかれるとのことです。それに釣られたわけではありませんが、担当の館員とともに私も参加させていただく予定です。日頃は無沙汰がちの会員の皆様と一日ご一緒して、郷土の誇るべき文化財を訪ねることができるということで、有り難く、今から楽しみにしているところです。

休室にともなう諸々の作業に追われているさなか、悲しい知らせが伝えられました。9月2日の夕刻、洋画家の遠藤健郎さんが亡くなられたということです。享年95歳ということで、天寿を全うされたわけではありますが、永のお別れは今さらながらに切なく、胸に迫ります。遠藤さんは特別展のオープニングには必ず参加され、その優しい笑顔のをせた長身のお姿に心をなごまされたものでした。いつもダンディーで、お年のことを忘れさせられていましたが、ついに昇天の運命を迎えられてしまいました。2005年に当館で回顧展を開かせていただいたことが、今ではせめてもの慰めとなります。謹んでご冥福をお祈りいたします。

この秋は、今上陛下のご即位20周年を記念する「皇室の名宝」展が東京国立博物館でおこなわれています。その他、美術の秋ならではの企画展が目白押しです。当館では、休室中も来年、再来年の展覧会の企画を進行中です。市民の皆様の多様な期待にお応えできるよう、様々な内容の展覧会を仕込んでいるところです。改装なった展示室で再びお目にかかれる日まで、どうぞご健勝にお過ごし下さいますように。再会を楽しみにしております。

〔館長 小林忠〕

*友の会バス・ツアーは好評のうちに締切らせていただきました

追悼 遠藤健郎先生

美術館開館以前よりお世話になっておりました画家の遠藤健郎先生が亡くなられました。2005年の「遠藤健郎絵画展―戦後は終わった」の担当をさせていただき、何度かご自宅にうかがったことがあります。コーヒーをご自分でドリップで入れてくださったり、黒ビールにチーズをご一緒にしたり、ご高齢とは思えないダンディーな方でした。辛辣で皮肉屋で、でもユーモラスで目はいつも優しく、大変温かい方でした。戦争や戦後のことを多く作品にもされてきましたが、折りにふれ先生は私に戦争と社会の話をしてくださいました。戦争を知らない世代に、それがどういうことであったのか、社会が向かってはいけない方向性のようなものを私に伝えようとしてくださったように思います。

先生のお葬式に参列しながらいろいろな思い出が頭をよぎりましたが、このお葬式を先生だったらどんな風に描くかしらと考えていました。きっととりわけユーモラスに皮肉を込めて描かれることで

しょう。当館所蔵の作品にも《お葬式》があります。天国でまた仲の良かった画家の山谷鎭一さんや国松画廊の国松伽耶さんと会われているでしょうか。謹んでご冥福をお祈りいたします。



遠藤健郎《戦後は終わった 鏡の中の私》
ペン、墨、紙 昭和30年代(1955-64)

千葉市美術館は、2009年9月より2010年2月まで、空調設備工事のため展示室及び貸出施設を休室いたします。ご利用の皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。美術館展示室での展覧会はお休みとなりますが、美術館1階さや堂ホール、千葉市民ギャラリー・いなげ、千葉市立郷土博物館にて、随時所蔵作品展を開催する予定です。

9月初頭より開始された空調設備工事。空調機械だけでなく、各階に行き渡る配管等も入れ替えるため、展示室やエントランスロビーの壁や天井もすでに所々取り除かれています。天井高がある広い展示室の温湿度を一定に保つためには大規模な空調設備が必要ですが、その交換作業は容易ではありません。今回の工事では美術館エントランス脇のポケットパークに大型クレーンを設置し、各階のバルコニーから直接資材の搬出入を行ないます。12階建ての美術館よりも高く伸びた大型クレーンのアームは迫力充分です

[休室中も所蔵作品展を開催]

休室中も当館の所蔵作品を皆様にご覧いただくため、下記の会場日程で所蔵作品展を開催いたします。ぜひこちらへもお運びください。

□2009年11月22日まで

無縁寺心澄の描いた千葉—絵と写真で見る昭和前期の千葉

[会場] 千葉市立郷土博物館(中央区亥鼻1-6-1)

[開館時間] 9:00-17:00(入館は16:30まで)

[休館日] 月曜日・祝日(11月3日)

*詳しくは3ページをご覧ください。

□2010年1月17日まで

現代日本の彫刻 その2 金属を素材とした作品を中心に

[会場] 千葉市美術館 1階さや堂ホール

[開館時間] 10:00-18:00

[休館日] 第1月曜日(11月2日、12月7日、1月4日)

電気点検日(12月6日)、年末年始(12月29日～1月3日)

*土曜日・日曜日・祝日は駐車場を使用できません。

*「現代日本の彫刻 その1 木を素材とした作品を中心に」は終了しました。

□2009年12月15日～26日

サトウ画廊コレクション～現代版画の魅力

[会場] 千葉市民ギャラリー・いなげ(稲毛区稲毛1-8-35)

[開館時間] 9:00-17:15 [休館日] 月曜日(12月21日)

*詳しくは4ページをご覧ください。

□2010年1月13日～24日

千葉大学普通教育科目「展示をつくるB」企画展示

[会場] 千葉市民ギャラリー・いなげ(稲毛区稲毛1-8-35)

[開館時間] 9:00-17:15 [休館日] 月曜日(1月18日)

□2010年2月9日～21日

浮世絵残照～明治時代木版画の名品

[会場] 千葉市民ギャラリー・いなげ(稲毛区稲毛1-8-35)

[開館時間] 9:00-17:15 [休館日] 月曜日(2月15日)

千葉市美術館は2010年2月まで休室いたします



ポケットパークに設置された大型クレーン



8階展示室の壁にも穴があけられ配管がむきだしに



美術館のエレベーターも一部閉鎖され工事専用

[美術館の施設も休室]

工事期間中は、美術館の貸出施設(11階講堂、9階市民ギャラリー、講座室、1階さや堂ホール)も貸出停止とさせていただきます。(ただし休室期間中も、10階事務室にて2010年3月以降の施設利用の申込を受け付けます。利用希望日の6ヶ月前から申込可能です。)また10階図書室も休室とさせていただきますが、ミュージアムショップは「現代日本の彫刻」展会期中のみ1階さや堂ホールにて営業いたします。

なお美術館展示室で開催される次回展覧会は第41回千葉市民美術展覧会(2010年3月6日-3月26日)となります。

無縁寺心澄の描いた千葉

— 絵と写真で見る昭和前期の千葉

美術館は、今秋空調改修工事に入りました。美術品の保存に適した温湿度を保つ空調機器は、いわば美術館の心臓です。建物が竣工してからはすでに15年程が経過しており、その間一日も休まず24時間運転を続けてまいりましたが、経年劣化も心配されるため、今後の長い美術品の保存・展示のために万全を期して工事が行なわれることになりました。ご迷惑をおかけしますが、どうぞよろしくご理解くださいますようお願い申し上げます。

さて工事期間中の活動の一つとして、美術館からも近距離の亥鼻公園にある千葉市立郷土博物館で、「無縁寺心澄の描いた千葉—絵と写真で見る昭和前期の千葉」展(2009年11月22日まで)を開催しています。

千葉市赤井町に生まれた無縁寺心澄(1905-45)は、亡くなる昭和20年までに、千葉市内の風景を多く水彩画に描きました。亥鼻公園、医大周辺、県庁や市役所周辺、千葉中学校など、千葉に住む者にとっては今も親しく感じられる風景が大量の作品に描き残されているのです。この展覧会は、古き良き千葉の様子を伝えてくれる心澄の作品を中心に、描かれた千葉と当時の写真資料等を並べて展示するもので、千葉市美術館と千葉市立郷土博物館の共同企画による初めての試みになります。

心澄は、当初は東京の川端画学校で日本画を学び、また昭和2年からは東京のザンボア図案社に勤めながら水彩画を学び、白日会や日本水彩画会といった画壇にも作品を発表するようになります。しかし徐々に、千葉を描き、千葉で画家として生きることに執着していったようで、憑かれたように夢中で千葉を描いた様子は、作品の中の早い筆の勢いに最もよく感じることができます。

「亥鼻公園」という図を見てみましょう。黒や藍色を多用した力強く激しいタッチで、亥鼻公園の木立とその間の道を歩く二人の人物が描かれています。水彩画なのですが、油絵のように重厚な絵具の用い方がされており、独特の描写が印象的な作品です。

画家の山谷鉄一(1910-2007)は、心澄が水彩を描く様子について回想しています。それによれば、長髪の心澄は、バケツと丸めた画用紙を持って水彩を描きに出かけ、川から水をくんで、パレット一面に絵具を出し、激しく早く描き出すのですが、筆では間に合わない、ハンカチを出して塗ったり爪でひっかいたりしたといいます。そのため心澄の親指と人差し指の爪がいつも斜めに減っていたのだ

そうです。この図でも、木の幹や地面を走る白い線は爪でひっかいて表現しているようです。

展覧会に先だって美術館のボランティアさんと、心澄が描いた千葉の主要な場所を、実際に歩いてみました。コースは美術館—亥鼻公園+千葉市立郷土博物館—千葉大学医学部—千葉高等学校(千葉

中学)—県庁といったところです。気がついたのは、一見乱暴に見える心澄の自由で激しいタッチの描写ですが、基本的には実景に忠実な構図で、土地の雰囲気がよく表現されているということです。

もちろん心澄が亡くなってから60年以上経つのですから、多くの場所が変化し、建物も新しくなっているのですが、心澄の視点が実感されて面白い経験でした。また増田材木店、イシゲ洋服店、羽田旅館(現在の羽田ホテル)など、当時と同じ場所に姿を変えて残っているお店も多くあることがわかり、何だか嬉しくなりました。

一方美術館から向かって亥鼻公園に入る手前に山谷石材店がありますが、これは心澄を慕っていた先述の画家山谷鉄一の生家です。娘さんのお話によれば、山谷鉄一と去る9月に亡くなられた遠藤健郎(1914-2009)、そしてやはり美術館近くにあった国松画廊の主人で画家の国松伽耶(1906-75)は、始終行き来があって仲良く活動されていたようです。今回の展覧会では、この三氏の千葉関連の作品なども展示しています。

郷土博物館では絵と比較できる古い写真なども用意しています。絵と写真を通して、昭和前期の千葉の姿を偲んでいただければ幸いです。また秋のよき日のに、心澄の描いた千葉を散歩してみるのもおすすめです。

いつもとは場所も雰囲気も違う、今ならではの展示をどうぞお楽しみください。

[学芸課長代理 田辺 昌子]



無縁寺心澄《亥鼻公園》水彩、紙、昭和前期



無縁寺心澄《増田材木店前》水彩、紙、昭和前期



無縁寺心澄《千葉中時計台》水彩、紙、昭和前期



千葉中学校時計台

無縁寺心澄の描いた千葉—絵と写真で見る昭和前期の千葉

2009年10月14日(水)▷11月22日(日)

[会場] 千葉市立郷土博物館
(中央区亥鼻1-6-1 Tel.043-222-8231)

[開館時間] 9:00-17:00(入館は16:30まで)

[休館日] 月曜日・祝日(11月3日)

[観覧料] 一般 60円
小・中学生 30円

サトウ画廊コレクションに見る 現代日本の版画 —吉原英雄の場合—

今回、千葉市民ギャラリー・いなげで開催する千葉市美術館所蔵作品展「サトウ画廊コレクション～現代版画の魅力」では、千葉市が1991年度に東京にお住まいの佐藤友太郎氏から寄贈を受けた美術品407点の中から、17作家による1950～80年代の版画作品約70点を紹介する。佐藤氏は銀座で画材店「サトウ画材」を経営するかたわら、1955年から81年にかけて「サトウ画廊」を運営されていた。御寄贈いただいた作品の多くはこの画廊で発表されたものである。

本稿では、出品作家のひとりである吉原英雄^{よしはらひでお}(1931-2007)について、覚え書きを記したい。

＊ ＊

吉原英雄は勤務先の京都芸術大学の学内報で、自らが勤務する版画研究室について、次のように記している。

美術にあまり馴染みのない人には、版画教室といえば、木版畫の教室だと早合点する人がいまだに多いのに驚きますが、ここでやっておりますのは、銅版畫とリトグラフ(石版畫)とシルクスクリーン、そして木版畫です。この4種類の版種が、版畫の中で、一応代表的なものと言ってもよいでしょう。

凹版、平版、孔版、凸版の代表的な版種で、それぞれ異なった版材を使い、製版法も刷り方も、違った方法で行われます。銅版プレス機、リトグラフプレス機、オフセット印刷機に木版プレス機などが、ずらっと並んでいる機械と機械の狭間で、版を作ったり下絵を考へたりしている光景は、他の教室とは少しばかり雰囲気が違ったものと、うつるかも知れません。

版画専攻に入った学生は、この4種類の基礎的技法を一応習得した後、興味のある版種を選んで、専門的に制作を始めます。

(吉原英雄「研究室訪問—版画研究室」、『芸大通信』No10〔1995年3月〕所収)



吉原英雄 《白い花》 1957年

吉原は1963年に非常勤として勤務して以来96年に退官するまで、この大学で版画制作を指導し、多くの学生たちを社会に送り出した。その中にはもちろん、卒業後も作品を制作することを選択した者もいる。現在活躍する版画家たちの中で、吉原門下^{よしはらじろう}が占める割合はかなり高い。それが、版という技術に対する彼の明晰な理解のおかげであることは、ここに引用した短い文章からもうかがうことができる。

吉原英雄は版画に取り組む前、遠縁の吉原治良(1905-1972)が率いる具体美術家協会(グタイ)に参加していたが、早い時期に同会を「ヒューマンな問題を抜きにして作品を作るつもりもない」として退会している。グタイは、絵の意味性や作り手のイメージを乗り越え、あるいは否定し、新しい絵畫のありようを目指していた。キャンバスや紙は、作り手のイメージが投影されるスクリーンではない。これはピカソにはじまり、20世紀後半には現代美術の大きな流れとなっていた思考のひとつである。「ヒューマンな問題」ということばには、この潮流に抗し、作り手のイメージを作品に取り込む制作に重きを置く吉原の姿勢が示されている。

吉原英雄に限らず、1950年代から70年代にかけて、現代美術の世界において、イメージを重視した作家たちの多くが版画を手がけた。なぜ、吉原たちは版というメディアに取り組んだのか。油彩のように自らの肉体とカンヴァスが直結している素材と違い、版画は「版」にイメージを置き換え、分解するという客観化の作業を要求される。この過程が、作り手の甘さを是正し、「より確かなイメージ」づくりのための鍵となったためである。版画は、彼らが作家として生き残るため自覚的に選んだ技術だったと言える。そしてサトウ画廊は、このような一見時流から取り残されたかに見える制作にこだわる作家と作品を応援し続けた。

＊ ＊

1981年にサトウ画廊は閉廊した。

その数年後アメリカやヨーロッパで生まれた新しい動向「ニュー・イメージ・ペインティング」によって絵畫(さらには美術ぜんたい)におけるイメージの復権(?)が叫ばれ、その余波もあって、わが国でも多くの若いアーティストたちが新たに登場した。

その中に直接・間接を問わず吉原英雄の薫陶を受けた若者が多数いたことは、決して偶然ではない。

[学芸係長 藁科英也]

サトウ画廊コレクション～現代版画の魅力

2009年12月15日(火)▷12月26日(土)

[会 場] 千葉市民ギャラリー・いなげ
(稲毛区稲毛1-8-35 Tel.043-248-8723)

[開館時間] 9:00-17:15

[休館日] 月曜日(12月21日)

[観覧料] 無料



WiCAN

千葉アートネットワーク・プロジェクト

2009

PIKAPIKA in CHIBA

TOCHKA × WiCAN × YOU

「千葉アートネットワーク・プロジェクト(WiCAN)」は、履修学生が主体的に運営に関わる千葉大学の授業として、市美術館のアウトリーチ事業として、また、地域NPO等によるまちづくり活動の一環として、アーティストとともに千葉のまちとアートの可能性を追求してきました。WiCAN2009では、これまで続けてきた中心市街地での活動に加え、新たな取り組みとして、海滨ニュータウンの高洲・高浜地区のコミュニティ再生活動を担う「特定非営利活動法人ちば地域再生リサーチ」との協力により、同地域でもプロジェクトを展開しています。

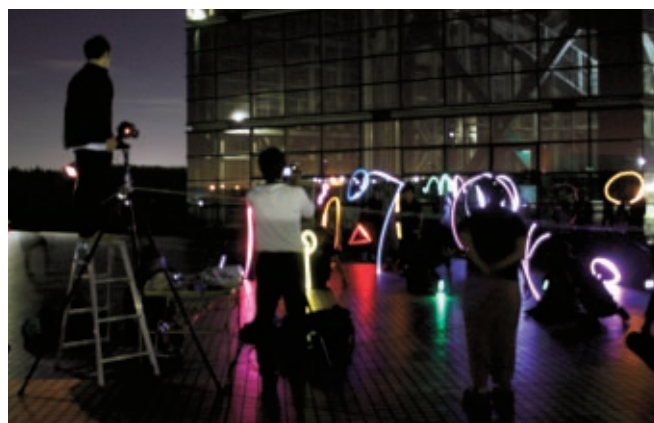
1970年代から開発が進められてきた団地の経年による様々な問題は、近年全国的に注目され、地域の課題に目を向けるアート・プロジェクトでもテーマとして取り上げられることは珍しくありません。千葉は国内でも多くの団地を抱えており、市の人口95万人のうち、美浜区の埋立地に広がる海滨ニュータウンには約12万人が暮らし、高洲・高浜地区には約4万4千人が住むといわれています。これほどの人が暮らす「まち」の持つ潜在的なパワーに、率直な魅力と可能性を感じた私たちですが、建築・デザインの視点から活動する人々との協働は、アート・プロジェクトとしてのWiCANに、新しい一面をもたらすに違いありません。

WiCAN2009では、トーチカ(ナガタタケシとモンノカヅエを中心としたクリエイティブ・ユニット)のアニメーション作品「PIKAPIKA」をメインに展開していきます。いつものまちをいつものとは違う視点でとらえ、その新たな魅力を見つけること。ワークショップに参加し、見知らぬ人々との間に生まれるコミュニケーションと予想を越えた展開を楽しむこと。アート・プロジェクトを通してそのような体験を伝えていきたいと願う私たちは、完成した作品そのもののおもしろさに加えて、見慣れた景色へのあざやかな介入や、ワークショップ形式による映像制作の進め方が地域の人々との関わりをひき出してきたところに強くひかれたといえます。

「PIKAPIKA」は、デジタルカメラによる長時間露光撮影とコマ撮りアニメーションの手法を融合させたもの。ペンライトで描いた光の軌跡が絵として静止画面に現れ、それをつないでいくことで数分間の映像作品ができあがります。「PIKAPIKA in CHIBA」の制作の核となるチームを結成するため、プロジェクトの学生以外にもスタッフを募集し、8月の初めにアニメーションの基礎と「PIKAPIKA」の仕組みについての研修を行いました。その後、美術館およびアー

トコミュニティ美浜でのワークショップを実施、一週間の撮影期間を設けて、アーティスト、プロジェクト・スタッフ、一般からの参加者が夜ごとに集まりました。コマ撮りアニメーションの制作は気が遠くなるような作業で、日が暮れてから数時間の撮影の成果が、ようやく1分程度のシーンになります。

ペンライトの先にピンポン球を付け、中にカラーセロハンを挟み込むと、様々な色の光が生まれます。撮影風景を見ると、「出演者」(実際の作品では姿は見えませんが)が、手に手に光るクレヨンを持って落書きをしているかのように、複数のペンライトの軌跡で一枚の絵をつくり、さらにアニメーションとしての動きにかなう連続した数十カットを撮り進める作業は、複雑な動きを伴う舞台上での集団パフォーマンスに例えることもできるでしょう。個々の想像力の駆使と、共演者間のコミュニケーションによって初めて、アニメーションは生き生きと動き始めます。



千葉ポートタワーでの撮影風景



美術館でのワークショップの様子

上映予定の作品には、北斗七星がメインキャラクターとして登場します。これは千葉の歴史と関わりの深い妙見信仰から着想を得たものですが、意外にも、「PIKAPIKA」で星が主人公になるのは初めてのこと。「PIKAPIKA in CHIBA」は、11月末より当館ほか市内各所で上映されます。上映スケジュール詳細は、WiCAN専用サイト <http://www.wican.org> もしくは当館ホームページをご覧ください。

11月の末から12月にかけて、今年度のプロジェクトは山場を迎えます。WiCAN2009全体に関わるシンポジウムの開催、「PIKAPIKA in CHIBA」の作品公開が始まるほか、ちば地域再生リサーチとともに、イースト・ロンドンの団地を舞台に活動しているコミュニティ・アーティスト、マイケル・ニーダムによる団地同士の交流プロジェクトを予定。8月に稲毛のショッピングモールで開催した「かえっこ」*も、クリスマスに再び行います。年が明けてもワークショップやイベントが続きます。美術館は長期休室中ですが、WiCANプロジェクトが皆さまをお待ちしております。

[学芸員 山根 佳奈]

*美術家藤浩志が考案した「かえっこ」は、「子ども通貨:カエルポイント」を使い、子どもたち自身が遊びの市場「かえっこバザール」(いらなくなったおもちゃの交換)を運営し、それを通じて自主的なコミュニケーションを試みていくことを目指す。

- 11/27(金) 「PIKAPIKA in CHIBA」上映会 [千葉大学]
- 11/28(土) WiCAN2009シンポジウム [会場未定]
- 12/6(日) 12:00～13:00 「PIKAPIKA in CHIBA」上映会 [千葉市生涯学習センター]
- 12/12(土) 「PIKAPIKA in CHIBA」上映イベント [WiCANアートセンター / 千葉市中央区栄町]
- 12/23(水・祝) 「かえっこクリスマス」 [会場未定]

千葉アートネットワーク・プロジェクト (WiCAN)

事務局: 千葉大学教育学部芸術学研究室内

<http://www.wican.org>

*上記サイトにて、イベント情報の配信登録を行っています。



「かえっこ」オークションの様子

ボランティア日和 episode21

小さな手でバレンを握り、一生懸命版画を摺っている。5歳位かな、お父さんとお母さんは後ろで見守っている。こちらから「もう摺れたかな、開けてみよう」と声を掛けると、慎重に版木から紙をはがす。完成だ。そこには可愛い小猫の4色摺りが出来上がっている。「上手く出来たね」と云うと、にっこり。一人で成し遂げた、満足感からの笑顔が可愛い。最初の版木から2版3版とだんだん画ができ上がり、最後の版で画が完成した時の、嬉しい感動が輝いている。子供さんばかりでなく、お父さんお母さんも同じ摺りを体験してもらい、一緒に喜んでもらえるのが、素晴らしい。

ボランティアの仲間、多色木版画を摺る体験型イベントの活動を始めてから、もう2年以上になります。最初は竹久夢二展のとき、私たちボランティアが夢二デザインのつばき・いちご・いちよう等を、しおりやはがきの大きさに彫って、摺りはお客様に体験してもらい、大勢のお客様に、夢二の当時としては新しい感覚に親しんでもらいました。木版画の摺りと云う作業の中で、お客様と私たちボランティアとの一体感、この時のお客様の喜びが現在の私たちの版画に対する取り組みにつながっています。その後、千葉市生涯学習センター主催の「まなびフェスタ」に参加し、自分たちでデザインした蔵書票を彫って、摺りの会を開催する等、木版画摺り体験のワークショップは、千葉市美術館、関係団体の皆様の賛同支援を得て、年に3回程の行事として定着してきました。

木版画を自分たちで彫って摺ることから、江戸時代の浮世絵をより深く学ぶことも出来ると思います。浮世絵の、あの精密な多色木版画は、どのようにして出来たのか。先人たちはどう工夫して、あのずれの無い美しい多色木版画を創り上げたのか。引きつけ見当、かぎ見当、見当の役割は。またカーボン紙もトレーシングペーパーもない時代に、下絵を版木に正確に転写するのに何を使ったのか。先人たちの創意工夫を知るにつけ、感心し、頭が下がるばかりです。絵師・彫師・摺師と版元、4者の協力関係の中で、彫師、摺師はもっと高く評価されてよかったと考えたりもしました。このような実践的な学習は、今後浮世絵また近代版画の展覧会で、お客様向けのギャラリートークの中で生かされてくると思います。

美術館と市民の架け橋、私たちボランティアは、今月も12月のイベントに備えて、子供たちのあの笑顔を想いのかべながら、彫りに向かっています。

[美術館ボランティア 坂口 智美]

*「摺りの会」が9月に参加した「青少年の日フェスタ」のイベント、「子供チャレンジ教室 多色摺り木版画教室～夏の思い出～」(千葉市生涯学習センター)には、150人近くのお客様がありました。次回は「まなびフェスタ2009」(12月6日 千葉市生涯学習センター)に新作(版)を用意して登場します。

◎タイの伝統楽器によるコンサートを開催しました。

企画展「祈りをつづる染と織 タイの美しい布」関連の催しとして、7月17日(金)と18日(土)の両日、1階のさや堂ホールで、若手タイ音楽家のティティボン・カンティウオン氏によるコンサート「メコンの精霊」を開催しました。メコン河流域の自然と共に暮らす人々の美しさに感銘を受けて作られたという8曲が、弦楽器サローをはじめとするラーン・ナー王国の伝統楽器の数々にて奏でられました。

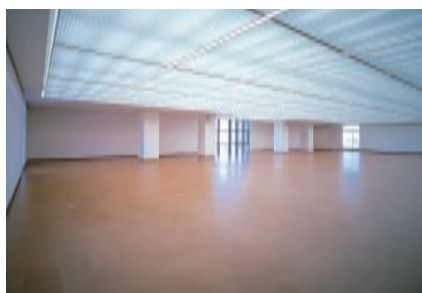


幻の弦楽器ビンピア



美しい音色に聴き入る満員の聴衆

あなたのグループも美術館で展覧会を開きませんか 「千葉市美術館市民ギャラリー」 平成22年度上半期利用者募集について



千葉市美術館市民ギャラリー(9階)は、美術に関連するグループに作品を発表していただくためのスペースです。美術サークル、美術団体、美術学校、カルチャースクール、学校の美術部、子供絵画教室など多種多様なグループが、絵画、彫刻、書、工芸、写真、デザイン、手芸などの展覧会を開催しています。

ギャラリーは、約160㎡の広さを持つ3つの区画ごとに貸出し可能ですが、3つあるいは2つの区画をひとつにつなげた広大な空間で大規模な展覧会を行うこともできます。(左の写真)面積あたりの利用料が、民間の貸ギャラリーより割安となっていることも魅力です。

	床面積	壁面長	1日の利用料
市民ギャラリー 1	162 ㎡	約 49 ～ 67m	9,170 円
市民ギャラリー 2	137 ㎡	約 36 ～ 54m	9,170 円
市民ギャラリー 3	162 ㎡	約 49 ～ 67m	9,170 円

*天井高は各ギャラリーとも2.9mです。各ギャラリーには控室が付きます。

【利用期間】

火曜日から日曜日までの6日間単位で貸出します。(延長はできません)

*ご希望により月曜日も13:00より開室することができます。

(半日分の料金が必要、第1月曜日を除く)

【開室時間】

10:00-18:00(金曜日と土曜日は20:00まで)

【利用条件】

千葉市内および近郊で活動する美術関連のグループが行う展覧会。

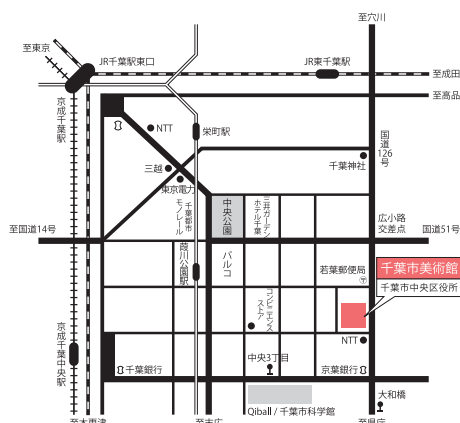
*個展および二人展は開催できません。また生け花展も不可です。

現在、平成22年度上半期(平成22年4月5日から10月3日まで)の利用者を募集中です。2月まで千葉市美術館は休室中ですが、10階事務室は開室(10:00-18:00)しておりますので、窓口に「市民ギャラリー使用仮申請書」を提出して下さい。(仮申請書の書式は、10階事務室でお配りしております。)

なお仮申請書の提出締切日は、平成21年12月28日です。

仮申請書の希望期間(第1希望から第3希望まで記入可)が重なった場合、抽選・調整のうえ利用者を決定し、1月末までに内定の通知を郵送いたします。

お問い合わせ ☎千葉市美術館 043-221-2311



【交通案内】

●JR千葉駅東口より徒歩約15分

○千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分

○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて

「中央3丁目」下車徒歩3分

●京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

●東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く

●地下に駐車場があります

【編集・発行】

千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan

http://www.ccma-net.jp

【発行日】2009年11月1日

【印刷】半写真印刷工業株式会社

 **千葉市美術館**
Chiba City Museum of Art